

こんな時代にロシア語のすすめ 第6回

「さまよえるカザフ人」

黒田 龍之助



カザフ人たちが目指したかったスポーツ街

大失敗をやらしました。

先日 JIC のスタッフと、都内のモルドヴァ料理店へ行くことになりました。最近はいろんなレストランがあるのですね。もちろん旧ソ連関係となれば、こちらは何でも興味津々ですし、そもそもモルドヴァ料理なんて初めてですから、とても楽しみにしていました。当日は現地集合で、わたしは大学の授業終了後に余裕で向かったつもりだったのです。ところが駅に着いて、いくら探してもお店が見つかりません。

おかしいな。

そこで急に気づきました。

お店の場所は亀有。

だけどわたしがいるのは亀戸。

なんという間抜けな間違いでしょう。東京人にあるまじき失態。慌てて亀有に向かったのですが、30 分以上も遅刻。恥ずかしいやら、面目ないやら。ちゃんと到着していれば、おいしいモルドヴァワインをもう 1 本くらい飲めたのに……。

地名は似ていることがよくあります。都内では千川と仙川とか、千駄木と千駄ヶ谷など、気をつけないと違う所に行ってしまう。

ロシアではどうでしょうか。知らない人にとっては、ナントカブルグとか、ナントカグラードとか、みんな似ているように感じるかもしれません。

知人がエカテリンブルグへ赴任することになったのですが、家族から素晴らしく美しい街なんだってね、行ったことはないけどといわれ、はて、そんな話は聞いたことがないと思い、よくよく聞いたらサンクトペテルブルグと間違えていたそうです。

外国語を学習するとき、似ている単語には気をつけなければなりません。それはロシア語でも同じ。ところが人間ですから、どうしても間違えてしまうのです。一方、こちらは長年ロシア語の教師をやりながら、学習者の間違い方のパターンの傾向を、次第に把握できるようになりました。

たとえばヂェーヴシカ девушка「娘、女の子」と、ヂェードウシカ дедушка「おじいさん」。どちらも人間を表す単語であるうえに、変化パターンも同じですから、作文しても文

法的には間違っていない。ある男子学生が「わたしは昨日おじいさんと公園を散歩しました」と書いてきたので、なんと優しい孫か、あるいは介護ボランティアに興味があるのかな思っていたら、本人は彼女とデートしたというつもりだったことがありました。

間違え方にはもう 1 つ、英語からの類推というのがあります。

たとえばファミリーや фамилия はロシア語で「名字」という意味です。ところが英語を知っているので、つい「家族」と間違えてしまう。「わたしの家族」のつもりで моя фамилия といったら、ロシア人は混乱するでしょう。

しかしこういう間違いは、日本人だけがするわけではありません。

ある週末、わたしは神田神保町を歩いていました。ご存じのように、ここは古書店の多い街として広く知られています。英米語専攻の学生といっしょだったのですが、このときは古本屋巡りが目的ではなく、なんとなく九段下から市ヶ谷方面でも散歩しようかと思い立ち、2 人でふらふら歩いていたところだったのです。

わたしたちの数メートル先には、外国人らしい 3 人連れが歩いていました。欧米人のように見るからに違う人たちではないのですが、かといって中国や韓国の人ほど近くもない。いったいどこの国から来たのでしょうか。まあ、最近の東京は海外からの観光客が増えましたから、どんな地域の人が歩いていても不思議はありません。

するとそのうちの 1 人がくると振り向き、わたしたちに英語で話しかけてきました。その英語が断片的で、ひどく聞き取りにくいのです。

「ウィル・ユー・ヘルプ・ミー？」

これは分かります。ところがそのあとです。

「……ミズーナ……。……マガジーン……」

はて、何のことでしょう。ミズーナなんて知りません。マガジーンは英語で雑誌の意味ですから、古書街で雑誌を探しているのでしょうか。いったいどんな雑誌なのか、だいたい

その人はその雑誌が読めるのか。ところがいくら問い質しても、それ以上はどうにも分からないのです。英米語専攻の学生も首をかしげるばかり。ヘルプしたくてもこれ以上は無理。相手も諦めて、残りの 2 人のところに戻りました。

いったい何を求めているのでしょうか。そもそも出身はどこだったのでしょうか。相変わらず前を歩く 3 人連れを眺めながら、わたしはずっと考えていました。

そのときでした。わたしは 3 人のうちの 1 人が背負ったカバンにある文字に気づいたのです。そして思わずアッと小さな声が出ました。

QAZAQSTAN

これってカザフスタンと関係があるのではないのでしょうか。としたら.....。

わたしは横断歩道で信号待ちをしている 3 人に小走りで追いつき、ロシア語で話しかけました。失礼ですが、ロシア語分かります？ ひょっとしてカザフスタンの方ではありませんか。

相手はわたしのロシア語に最初は驚いていましたが、やがて嬉しそうにズドラーストヴィチュェ Здравствуйте! といいながら握手を求めてきました。

いや、握手はいいんだって。

何を探していращやるのか、もう一度、今度はロシア語でいっていただけますか。

相手は相変わらず「ミズーナを探している」というのですが、相手はロシア語を話しているとなれば、急に勘が働きます。

それって、ミズノスポーツのことでしょ？

「スポーツ」という単語に、3 人の表情は一挙に明るくなりました。

神保町に隣接する小川町はスポーツ街として有名で、スキーやサーフィンなどの用具を扱う店が軒を連ねています。ミズノスポーツはそのうち大手の 1 つで、小川町には東京本社に加えて大型店舗もあります。ミズノといってくればすぐに分かるのですが、アクセントのない「オ」を「ア」と発音してしまうロシア語の癖のせいで、ミズーナになってしまったのでした。

ではマガジーンはどうでしょう。これは英語の magazine 「雑誌」ではなくて、ロシア語の магазин 「店」だったので。英語の中にロシア語を混ぜられちゃ、さすがのロシア語教師でも咄嗟に判断できません。でもやっと分かりました。

しかしミズノスポーツに行きたいとしたら、向かっているのは正反対です。そのままいったら靖国神社ですから、スポーツ用品は買えませんよ。今来た道に戻れば、やがて見えてきます。いいですか、ずっとまっすぐですよ。

相手は安心して逆の道を進んで行きました。

英語のマガジーンとロシア語のマガジーン。カザフ人にと

っては両方とも外国語。やっぱり混乱することがあるのですね。ちなみに QAZAQSTAN というのは、カザフスタンのテレビ局らしいです。もしかして何かの取材だったのでしょうか。

なに、大したことはありません。彼らはちょっと道に迷っただけです。神保町と小川町だったら、亀有と亀戸よりはずっと近いですから。

本の紹介

「女たちの独ソ戦」 ～彼女たちはなぜ戦場に行ったか

ロジャー・D・マークウィック、
ユーリディス・シャロン・カルドナ 著
五十嵐徳子、河本和子、藤原克美 訳
東洋書店新社
価格 4,400 円(税込)



重いテーマだ。第二次世界大戦中、数十万の女性たちが戦場に赴き、ソ連に侵攻するナチス・ドイツと戦った。独ソ戦の勃発とともに数多くのソヴィエト女性（フロントヴィチカ／その多くはコムソモール活動家だった）が、前線行きを志願した。彼女たちの希望に反して、その大半は看護師や防空、消防、塹壕掘りなどの後方支援活動に回されたが、中には狙撃兵、飛行士、パルチザン戦士として、前線での軍事行動に直接参加し、戦死ないし深刻な障害を心身に負った女性兵士も多くいた。こういった「軍務」に就いた女性の総数は 100 万人と言われる。

なぜ、スターリン体制下のソ連でかくもたくさんの女性が戦場に赴いたのか。ナチスの「絶滅戦争」の地獄とスターリンの赤軍で、彼女らはどう扱われたのか。

本書は、独ソ戦においてソ連女性がなぜ、いかに戦ったかを解き明かすべく、オーストラリアの 2 人の歴史学者が刊行した“Soviet Women on the Frontline in the Second World War, New York, 2012”の全訳である。

本書まえがきによれば、当初の研究動機は別にあった。極端に抑圧的で過酷な性質を持つ 1930 年代のスターリン主義国家という条件下で、何百万人ものソヴィエト市民が、男性も女性も、明らかに積極的に、ドイツのファシズムから「母

国」を守るために非常に粘り強く戦った理由は何なのか、それを知りたいというのが最初の動機だった。これまでのソ連研究において、スターリン主義の暴力的・抑圧的な特質と、それに対する人々の抵抗については多くの研究成果が発表されている。独ソ戦においても、残虐なドイツ軍から否応なく身を守るために、あるいは政治的・思想的理由から、対独協力したソ連市民はいたが、しかし「協力者」は少数派で、圧倒的多数は、戦争初期に赤軍が壊滅的な敗北を被った後も、彼らの祖国に忠実であり続けた。スターリン主義にもかかわらず、ソ連市民の大多数がソヴィエト国家と一体化してナチス・ドイツに立ち向かった理由として、著者らは、「1917 年の十月革命によって引き起こされた政治的、社会的、経済的变化と、それに続く 1930 年代の大規模な転換」「政治言説を独占した国家の監督下で起きた戦前の 10 年間における産業、人口、教育の大規模な変化」が、このような大衆の国家への献身を生み出したという仮説を立てる。その例証として、独ソ戦へのソ連女性の軍事参加が取り上げられたわけではあるが、はからずも独ソ戦においてソ連女性たちがどのように戦い、スターリン主義国家からどのように扱われたかを具体的、実証的に解き明かすものとなった。

本書では、有名な女性志願兵の例として、「夜の魔女」爆撃航空連隊、地下抵抗運動とパルチザンの女性兵士、女性狙撃手、女性のみで編成された女性義勇狙撃旅団などが取り上げられる。

戦争中のソヴィエト女性の戦いについては、従来、型にはまった英雄的・愛国的物語が中心だった。「戦争は女の顔をしていない」（スヴェトラナ・アレクシエーヴィチ、1985 年／2004 年新版）は、前線で従軍した女性たちの体験を主にインタビューで発掘し、ソ連時代に流布された戦時下の女性たちの英雄的活動の暗黒面を抉り出したが、本書はそれを、ソ連時代の刊行物や最近公開された公文書（歴史資料）、さらに将校や政治委員の報告書、コムソモールや共産党の議事録、回想録なども駆使して分析し、当時のソ連社会と女性兵士たちの状況を包括的に描き出している。アレクシエーヴィチが収集した女性兵士たちのインタビューが、その「生の声」の持つ臨場感と説得力を有していた反面、人間の記憶が持つ制約と偏向を免れなかったのに比べ、本書は可能な限り客観資料に基づいて歴史的事実を描き出そうとしているところに特徴がある。

それまで男性の領域とされていた労働分野への女性労働者の進出がソヴィエト社会において著しく進んだことと併せて、女性の戦争への直接参加は、スターリン主義社会主義国家の何ごとかを確かに物語っている。しかし、それらがその後のソ連社会・ロシア社会における女性の地位にどのような変化を与えたのか、おそらく翻訳者たちの問題意識もそのへんにあったのではないかと思われる。(F)

本の紹介

「マトリョーシカのルーツを探して」

～「日本起源説」の謎を追う～

熊野谷 葉子 著

岩波書店

定価 2970 円(税込)

ロシアのお土産として有名なマトリョーシカ。日本のこけしに似たずんぐりした体形の入れ子人形で、中から次々と一回り小さい人形がでてくる。このマトリョーシカが、日本の入れ子七福神をモデルに作られたという説は本当だろうか？



「描かれている女性がロシアの民族衣装である『サラファン』（肩ひも付きロングスカート）と『プラトーク』（スカーフ）を身に着けていることもあって、マトリョーシカは昔からある民衆工芸品だろうと思われがちだが、実はその存在は 19 世紀末までしか遡れない。しかも農民が自分の子どものために手作りした素朴な民衆玩具などではなく、最初から都会の店で販売することを目的として考案され、腕利きの木工職人が高速回転する木工ろくろで木屑を散らしながら削り出していた、いわば民衆風木工品である。

というのは確かなのだが、実はマトリョーシカ誕生の詳しい経緯は謎につつまれている。誰がいつ考案し、誰が最初に木を削ってあのフォルムを作り出し、誰が女性の姿かたちを描いたのか。たった 120 年ほど前のことだというのに、そしてこんなに有名な工芸品だというのに、実はそんなことも分からない...」（プロローグより）、と著者は言う。

「マトリョーシカ日本起源説」とは次のような言説だ。

- ①明治期、日本にきたロシア人が、入れ子の箱根七福神人形を持ち帰った。
- ②モスクワ郊外アブラムツェヴォ村で、ロシアの鉄道王マーモントフの妻エリザヴェータがそれをもとに人形を作ることを発案した。
- ③ろくろ師ズヴォーズドキンが型を挽き、画家マリューチンが絵付けをしてマトリョーシカが誕生した。
- ④マトリョーシカは 1900 年のパリ万博に出品され、メダルを獲得して有名になった。

この日本起源説は 1960 年代から日本でもロシア（ソ連）

でも言われ始めたが、1990 年頃に NHK が取材報道したことで広く知られるようになった。「ロシアの人気お土産人形が日本にルーツがあるなんて、面白いじゃないか」というわけで、日本でのマトリョーシカ人気に火がついた面もある。

しかし、著者が調査を進めていくと、これらの説はすべて具体性を欠いた不確かなものになっていく。マーモントワ夫人が明治期に来日した事実はないし、日本にいたロシア人が持ち帰った証拠もない。何よりも、マトリョーシカ誕生に関わったのはエリザヴェータではなく、その親戚で、「子どもの教育」という玩具・雑貨店をモスクワで営んでいたマリヤ・マーモントワだった。初期のマトリョーシカにはいろいろな絵柄があるし、工房や製作者についてもいくつかの説が出てくる。こうして、「日本起源説」は一種の伝説に過ぎないことが早くもプロローグで明らかにされる。

ところが、本書はここで終わらない。いや、ここからが本番なのだ。著者は、第 1 部ロシア編「マトリョーシカ誕生をめぐる」、第 2 部日本編「入れ子七福神を探して」と、二段階に分けて本格的な探求を開始する。ロシアでのマトリョーシカ誕生をめぐる事実関係と、その生産が始まった 19 世紀末の経済社会関係、挽き物＝轆轤（ろくろ）で製作された木工細工の生産と流通過程、同じく日本での挽き物の歴史と明治・大正期の箱根細工の生産・販売経路をたどることで、日本とロシアでの大衆民芸品の誕生と生産・販売の意外な類似性が見えてくる。

かといって本書は堅苦しい学術書ではない。ロシアと日本での聞き取りと調査をベースにした「マトリョーシカの謎を追う」楽しい読み物となっている。マトリョーシカ好きの読者に是非手にとっていただきたい一書である。(F)

本の紹介 《予告編》

『舟』～北方領土、志発島で起きた日本人とロシア人の物語

榎本 真奈美（翻訳者）

ロシア人脚本家マイケル・ヤングの書き下ろし小説『舟』が今春刊行予定だ。

ヤングは、亡き友人アンドレイ・ラクーノフ〔映像作家、ウラジオストク国際映画祭上映責任者、2020 年没〕の家族にまつわる出来事をもとにこの作品を書いた。

「南クリル諸島(南千島)で起こった日本人とロシア人の友情、人間の決断と運命について書いた物語」とは著者の言葉だ。

舞台は志発島(しはつとう)、歯舞諸島を構成する島の中で最大

の面積を有する島である。

第二次世界大戦でソ連軍は日ソ中立条約を破って参戦し、日本がポツダム宣言を受諾した後、千島列島を占拠した。1945 年 2 月、米英ソ 3 国のヤルタ首脳会談において、ソ連の対日参戦の条件にソ連への南樺太の「返還」と千島列島の「引き渡し」を決めるヤルタ密約があったことなど、当時の一般庶民が知る由もない。北方四島には同年 8 月 28 日にソ連軍が択捉島に上陸、それから国後島、色丹島、歯舞群島に順次進攻した。9 月 2 日に米戦艦ミズーリー号で降伏文書の調印式が行われたが、その後の 9 月 5 日に北方四島のすべてが占領された。

終戦当時、北方四島に暮らす民間の定住者は 1 万 7000 人いたが、北海道に比較的近い国後、色丹、歯舞群島の住民の半数以上は、終戦から約 3 ヶ月の間に所有するポンポン船や櫓漕ぎ舟を使って、ソ連軍に見つからないよう自力で脱出した。

1946 年 12 月、連合軍司令部とソ連代表との間で「ソ連地区引揚げに関する米ソ協定」が調印される。北方四島を含め千島列島の引揚げ希望者全員がソ連側の貨物船で樺太の真岡にいったん移送され、そこから日本の引揚げ船によって順次函館に送還された。1949 年の最終引揚げ船(千島列島からは計 3 回)が出るまでにソ連本土から一般のロシア人の入植がはじまり、日本人とロシア人の間に数年間の「共生」期間がうまれる。

アンドレイ・ラクーノフの母親リュドミーラは子どもの頃、まさにこの時期に志発島に移り住んだ。ソ連政府は仕事と住居を保証することで、民間人に対して千島列島への移住を募集した。応募した男性の多くはドイツ戦で負傷し、故郷に帰還するも職につけない人たちが多かったという。リュドミーラの父親もそのひとりだった。

1947 年に島から日本人が強制送還される日、リュドミーラは姉ガリーナと兄ゲンナージー、近所の友人と 4 人で「箱舟」に乗り沖に流されてしまった。天候が悪化し、ロシア人が救出を試みるもうまくいかなかったところを、ある日本人漁師に救出された。日本人島民は当時、引揚げ船を逃すと日本に二度と行けないと言われていたにも関わらず、助けに出たという。

大陸から新たに入植したロシア人は海の知識に乏しく船の操縦も不慣れだったため、引揚げを待つ日本人と「共生」する間に漁の技術を学んだ。島に残った日本人が所有していた船はすべて没収され、逃げないように銃で撃たれ穴を空けられた船も多かったという。ロシア人は日本人漁師と二人一組のペアになって操縦を習得した。日本人に対しては、魚を入れる木箱を舟の代わりにして釣りをしたり、移動することは許されたという。先に触れた「箱舟」とはまさにこの木箱のことで、子どもたちはこの箱舟に乗って沖に流されたのだった。

アンドレイは「命を救ってくれたあの日本人とその子孫を探して欲しい」という母親の遺言を守り、ソ連崩壊後にビザなし交流に何度か参加してこの日本人を探そうと試みたそう。残念ながら、聞きなれない日本人の名前を正確に覚えていなかったのか、それらしき人の手がかりは見つけられなかったという。

『舟』は、アンドレイが母親から伝え聞いた救出劇が物語の核になっている。

1947 年、日本人強制送還の日。ロシア人との「共生」生活も約一年が経った頃、島の沖に見慣れぬ貨物船がやってくる。ベテラン漁師の浩は息子の勇夫と一緒にいつも通り海に出て魚を釣るが、ふたりが乗る船はエンジン付きのポンポン船ではなく「箱舟」だった。浩は船の操縦と漁のやり方をロシア人に教えるうちに、互いに信頼関係を築いてゆく。他、日本の船職人のもとで船作りを学ぶニコライ、その娘のカーチャと勇夫の恋心、誠とヴェーラの秘密の逢瀬、強制送還の任務を担った内務人民委員部の冷酷なフロロフ、ソ連当局と日本人の狭間で苦悩する日本語通訳のカジン、引揚げ船に「もっこ」で吊られて乗せられる日本人、ロシアの子どもたちの遭難、決死の救出劇……。

大陸から入植したロシア人と故郷を追われる日本人、それぞれが織りなす人間ドラマには単純な二項対立をはるかに超えた魅力がある。ロシア人がロシア人の目線で描いた終戦後の北方四島にまつわる物語は珍しく、ロシア人の微妙な心情も描かれているところが面白い。

この作品を翻訳しながら、ロシアと日本でこの事件に関する情報収集と裏付け作業を進めた。

幸い、亡くなったアンドレイの妹が現在色丹島に暮らしていて、同じく母親からこの救出劇のことを聞いて育ったということがわかった。しかも、母親と一緒に箱舟に乗っていた叔母のガリーナさんがウラジオストク近郊の町にご存命で、この救出劇をはじめ当時の暮らしぶりを直接語ってくれることになったのだ。貴重な家族写真も提供してくださったのでとても感謝している。

本書ではガリーナさんのインタビューの他、この家族と同じ時期に志発島に移住し、この「箱舟救出事件」のことを書き記したロシア人の証言も収録する。ロシア人の大人たちが慣れない船で救出を試みたが失敗したこと、海を知り尽くした日本人漁師が風向きや潮の流れを考慮して 6 キロメートルも流された子どもたちを見事に救出したことがわかったのだ。当時の入植したロシア人から見れば神業に見えただろう。いつばう、日本人漁師にとってはそう難しいことではなかったのかもしれない。だから周囲や子孫に語り継ぐこともなかった……。日本側に証言が見つからないのはこうした事情だと推測している。

ガリーナさんのインタビューより

私たち家族はこの日本人のことをいつも思い出し、子どもたちにも語って聞かせました。そして、いつしかこの物語が私たち家族だけでなく、たくさんの人々の財産になったのです。私たち家族が持つ記憶がもっと沢山の人の知られ、人々が互いに思いやり助け合うよう、大切なことを理解する手助けになるように願っています。

他、12 歳まで志発島で暮らし、ロシア人との共生期間と引揚げを体験された木村芳勝さんのインタビューも収録、『舟』は筆者が翻訳し、皓星社より今春、出版予定。

日口交流協会講演会／23 年 11 月 26 日／講演要旨

「日口、日中の外交の現場に立って」 中口国境問題の解決の分析

講師；井出敬二氏（立教大学大学院法学研究科）

私は 1987 年に外務省に入り 2020 年に退職した。その間、ロシアと中国の大使館で外交官として勤務した。2017 年に出版した本「＜中口国境＞交渉史—国境紛争はいかに決着したのか？」に書いた内容をもとに、ロシアと中国の国境交渉について解説したい。

* * *

ロシアと中国の関係史は、「タタールの軛」と呼ばれるモンゴルがロシアを間接支配していた時代（13～15 世紀）に遡ることができる。学問的な定説があるわけではないが、モンゴルの支配はロシアの中央集権的で垂直的な統治スタイルに影響を与えたのではないかとされている。

1618 年、明の万暦帝の時代にロシアはペトリンという最初の公使節を中国へ派遣した。その後、中国は清の時代になるが、ロシアのシベリア東進にともない、1652 年に清とロシアの最初の武力衝突が起こり、翌年ロシアはネルチンスク（現在のチタ市の東方 200km）に砦を築いた。その後もいくつかの衝突があり、結局、1689 年にネルチンスク条約が結ばれて、アムール川の支流アルグン川の西側と、アムール川（黒龍江）とスタノボイ山脈（外興安嶺）を結ぶ線に最初の中口国境が定められた。ネルチンスク条約は清がヨーロッパの国家と締結した最初の対等な条約である。

国境交渉開始前の歴史関係

その後も 18～19 世紀を通じてロシアの東進と南下は続き、1858 年の璦琿条約で清はアムール川（黒龍江）以北の領土を失い、アムール川に合流するウスリー川の東側（沿海州）は両国の共同統治とされた。しかし、1860 年の北京条約で清は沿海州もロシアに獲られてしまった。ネルチンスク条約時の領土と比べて、清は約 150 万 km²（日本の面積の 4 倍）をロシアに奪われたというのが、中国の言い分である。璦琿条約が結ばれた中国・黒龍江省の黒河（対岸はロシアのブラゴベシチェンスク）には璦琿歴史陳列館という歴史博物館があり、ここには中国から見ていかに多くの領土をロシアに奪われたかを示す様々な展示がある。

中国とソ連・ロシアとの国境は、ロシア極東—モンゴルと接する東部国境とは別に、西部国境もある。ソ連時代には、モンゴル—ロシア—カザフスタン—キルギスタン—タジキスタンと西部で接していたが、現在の中口西部国境はモンゴルとカザフスタンの間のごく短いものである（約 54km）。